

四賢婦人と呼ばれた姉妹



矢嶋 楯子

やしまかじこ

天保4(1833)年生まれ
矢嶋家六女として生まれる。
女子教育や女性の地位向上に尽力。
婦人参政権・廃娼・禁酒運動に貢献し、
明治22年にキリスト教系女学院(現東京・女子学院)を創立し初代院長になる。大正14年93歳没。

結婚と離婚と旅立ち

矢嶋勝子(後に楯子と改名)は肥後国上益城郡津森村杉堂の惣庄屋矢嶋忠左衛門直明と母鶴子の間(2男7女の六女)に生まれた。

勝子は学校などない当時、母鶴子から厳しく教育され、母亡き後は母に代わり、兄・直方のために尽くした。兄もそんな妹を想い、良縁を求め、勝子が25歳の時、横井小楠の弟子で、武家出身の林七郎に嫁がせた。

七郎には前妻があつて、既に2男1女の子どもがおり、勝子は3番目の妻となった。自らも1男2女を儲け、6人の子どもの母になった。

夫はいわゆる「昔気質」で、酒乱の気があり、酒を飲んで勝子に暴力をふるった。そんな中、先妻の子ども3人と自分の3人の子どもを育て、家事と育児と大変厳しい生活

を勝子は必死で耐えた。夫の酒乱がひどくなるにつれ、極度の疲労と衰弱で、勝子は半盲状態になった。

「自分が破滅すれば、同時に子どもも破滅するし、夫も救えない」と思った勝子は、結婚8年目でついに離婚を決意。

一番下の達子を連れて杉堂の実家に逃げ帰った。林家からの迎えに対し勝子は、自分の頭髪をおつとりと切つて渡した。「無言の離縁状」を叩きつけたのだった。(※)

その当時離婚は珍しく、理解を得られないため、離婚した女性には苦渋の道が待っていた。夫七郎からの仕打ちは、後に禁酒運動に心血を注ぐきっかけとなった。

離婚後の明治5(1872)年、勝子は明治維新の気運の中で、活躍している兄や姉らを見て、「私も新しい進路を開拓しなければ」という心境になる。そんな時、兄・直方が病に倒れたという知らせがあった。

四賢婦人記念館と 四賢婦人誕生地之碑

江戸後期(約200年前)に益城町杉堂に建てられた家屋を復元したものです。館内には、矢嶋家や徳富蘇峰に関する古文書や生活用品等を多数展示しています。また、記念館の敷地内には「四賢婦人誕生地之碑」があります。



※徳富蘆花著「竹崎順子伝・久布白落実著「矢嶋楯子伝」における離縁の経緯については「幕末・維新期」という時代背景を加味しての考察が必要であり、「西南戦争時に小谷の農民一揆を抑えた」「西南戦争直前の戸長征伐のことか」ほどの力を持っていたとされる「武士林七郎」としての評価を含めての「林七郎像」を再度見直す必要がある。